

傳河南省彰德府外殷墓出土

人面蛇身虺龍文盃

(上)蓋上面觀

(下)側面觀

(解說三八頁)



西アフリカに於ける二つの交易形態

岩 田 慶 治

梗概 西アフリカに於ける二つの交易形態、局地商業と遠距離商業とを擇んでその成立の由來を考えてみた。それは一面においてはフオーナ、フローラなど環境諸條件の相違に依存しているものに違いないがやはりそれらの異つた環境を自らの住地として承認し、選びとつてゐるそれぞれの社會、云わば自然に對する人間の問いかけの相違であらう。しかもそのときこれら人間の性能も元來は摸め易い一つのものであつたのだが、只それぞれの経過した社會的な教育の相違によつて今日の如き異つた姿を示すに至つたものと考えたい。要するに民族の性格に對するディナミックな考へ方、人間能力の再評價が問題なのである。

一

ある。

バルト (H. Baeth) が度々注意してゐるように、西アフリカには一見著しい対照を示している二つの市場がある。^①

一つは南ニジェリア地方に發達してゐる夕暮の市場であり、一つは北方ステップ地帯に繁榮してゐる眞晝の市場で

この二つは地域的な交易形態の相違と考へることも出来るが、また舊と新との層的な差違と考へることも出来る。

今、イボ族の市場をもつて前者を、ハウサ族の市場及その交易形態をもつて後者を代表せしめ乍ら、二つの型、ひろく社會現象をも含めた二つのパターンの成立の由來をたず

ねてみた。

II

イボ族 (Ibo) はニジェール川下流の森林乃至サヴァンナ地帯を切りひらいて農耕生活を営んでいる部族であつて、イスラム化したハウサ族や遊牧的なフルベ族の影響をうけることの最も少い、従つて最も純粹にスーダン・ニグロ固有の性格を保持しているものと考えられる。曾てマイヤー (P. C. Meyer) が荒野の部族と命名したものであつて、今日もスーダン一帯の處々に残存している最も古い部族の一つなのである。^①

イボ族の生活はハック耕を中心として營まれてゐる。三月、最初の雨が過ぎたとき黍を植え、四月にはヤムを、五月にはココヤム、七、八月にキャサヴァ、綿花を植えると云つた方式であるが、其中でも彼等の生活に古くから、且最も深く滲透してゐるものは、或はアフリカ原産と云われるヤム薯の栽培である。^② イボ族はニジェリア地方に於ても最も熟達した耕作者であり、收穫時期の異つた三―六種類の

ヤムを注意深く育成することによつて、凡そ四ヶ月の間殆ど繼續的に新鮮な食糧を收穫してゐる。しかも道具として持つてゐるものは、短く柄のつうた鋏 (Hacke) と、所によつては更に原始的な掘り棒とであつて、そのために耕作に費す配慮は一層甚しいものとなつてゐる。或る地方には牛や馬も飼育せられてゐるが、すべて富の象徴であり、犠牲のために殺すことはあつても食料として日常生活には何等の役割をも果してゐない。^③ かくして此處では一年は植付と收穫の時期とに應じて十ヶ月に區分せられてゐるが、彼等にとつて畑に何の作物も作られてゐない、従つて農園労働の行われぬ時期は、云わば何の意味をも持たない空虚な時間と考えられてゐる。^④

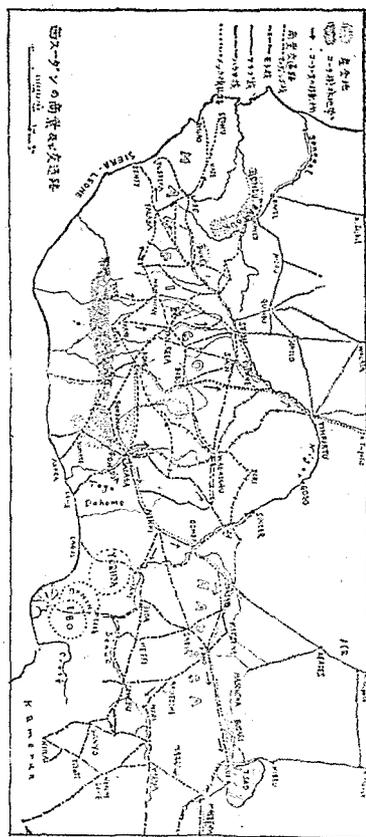
然しながらこのように低級な農耕生活の中においても、やはり個人的な巧妙さから出發した技術的分業化への傾向が認められるのであつて、例えば製陶、製鹽、鍛冶等を專業とするものゝ發生を見、やがて農耕生活自體の中から商業活動への萌芽を讀みとることが出來るのである。南ニジェリアに於てもヨルベ族の狩人は一種の職業團體を形づくり

戦時には探偵となつて各地に潜入し、イボ族の職業的狩人も盛に移動交通し、エヨイ族では明かに狩人が時に商人として出現し、更にクロス川附近のハウサ族の象狩人はヨルバ地方では有名な商人であること、またアウカ地方の鍛冶屋は一定期間遠距離商業を試み、エヨイ族の鹽商人もまたイボ地方を縦横に通商するなど、分業の結果として成立した職業團體は先ず行商の姿をとつてその母胎である農民とむすびつく。^①

ところでこのように行商によつて共同生活を保つていた、幾つかの特殊集團と農耕社會との關係が安定し、恒久性を示してゐるにつれて次第に出現してきたものが市場であると云つてよいであろう。従つてトーマス(Thomas)も云うようにこの地方における新しい市場の開設は極めて簡単な事柄であり、先ず村民の協議によつて場所が決定され、そこに市場の平安を見守ると云うアロセの樹を植えさえすればよいのである。夕暮ともなればこうした厩場に女たちが集つて、料理した食物、魚、ヤム薯、椰子油などを賣り、また定期的に男の商人たちが落合つて壺、織物、小

刀、鶏、豚などの露店をひろげる。イボ地方に於ても各村々は皆自身の市場を持ち、四日を一週とする所謂イボ週間の呼び名に従つてそれぞれの市の名稱がつけられてをり、例えば縮尺二十萬分の一の地圖に於てさえ、そこに Eke Mkt. (一日市) Orié Mkt. (一日市) Afaw Mkt. (三日市) Nkwaw Mkt. (四日市) と云う極めて多数の地名を見出すことが出来る。^②そして元來はこれも市場開催の周期から發生したと云われているイボ週間の通用している地方も、東はクロス川、或いは更に遠くカメルーンから西はベニン、南ヨルバを経てダホミーに迄及んでおり、ヨーロッパ流の七日制を採用しているところは僅かに海岸地方に見られるにすぎない。もともとこれらの市場は、村の廣場或いは十字路に開かれた露店にすぎなかつたのであるが、バースデン(Baden)の觀察によると市場の地域が平和になつてゆくにつれて物賣り小舎の設置が見られるのであり、更に北西イボ地方に於ては高度に發達した云わばバザー的な色彩を持つたものに至つてゐる。^③代表的な市場についてみても、例えばはUburuでは十六日毎に開か

下圖は西アフリカの商業交通路を示すものであるが、産金地その他現在のものとは多少の相違がある。しかしサハラ、スーダン、ギネア沿岸地方の交通組織がそれぞれ異つた民族により營まれてをり、スーダン内部に於ても西方はマンデインゴ族、東方はハウサ族と各々が地域的に分擔せられていることを知り得る。



れ千六百人の會衆があり、Duncombeでは八日毎に開かれ Naomi, Utehiの市には五—八千人が集り、Ibuku, Ashaba, Otaga, Isilegu, Pataniの市にも二—五千人の來訪

者が計算せられてゐる。けれどもこれらはイボ地方においては云わば特殊なものであつて、一般には夕暮に立つ日毎の市は勿論、週市と雖も比較的小規模なものなのである。

住民は一日のうち農園と市場とを往復しうるうちに、また商人も順次に各市場を巡回しうるうちに、市場間の距離は普通十五—二十五料を超えることはない。しかしこうし

た局地的な市場網の發達は目覺しく、これが南ニジェリア特にイボ地方における經濟活動の著しい特徴となつてゐるのである。

一方、さきにそれが特殊な市場であると云つた理由は、そこに北方からハウサ商人がやつて來るからであつて、彼等はこれらの市場を據點として更に大きな商業活動を營んでゐるのである。以下、後者の典型としてキャラヴァンによつて運ばれるコーラの實の動きをたどつてみよう。

三

コーラ (Sterculia cola) は主に高温多湿な地域、シエラ・レオネの海岸地方からニジエ川下流地方に至る、北緯六乃至八度の細長い帯状の地域に産する。そしてハウサ族によつて營まれてゐるコーラ交易は、この地域と北方の都市群とを結ぶ遠距離商業の組織である。勿論、彼等の運ぶものは決してコーラの實だけでなく、黄金、象牙、奴隸、穀物など重要なものがあるが、いま特に西スーダン内部の事實であるコーラに問題を限定しておく。^⑧

コーラ交易はキャラヴァンの仲介によつて行われ、ハウサ、マンディングゴ、モシ、アラブの諸族が之に従つてゐるが、第一位に位するものはハウサ・キャラヴァンである。故に先ずこの民族の性格を考えてみよう。

「民族學」(Völkerkunde) の中におつてラツニエル (E. Ratzel) はハウサ族 (Hausa) の特徴を次の様に規定してゐる。即ち、ハウサ族は最も典型的なスーダン民族であつて所によりその程度は異なるが、ニグロとの強度の混血

を示し、更に古代ベルベル人の血を交えてゐる。この民族は自己と接觸する民族に自己の言語と習慣とを採用せしめ、最も異種の要素をさえ自己の性質の中に融かし込むと云う高い能力を持つてゐる。と、恐らく元來のハウサ族は北方から下つて來たものらしく、言語や人類學的特徴もこのことを示し、サハラ縁邊には今日もハウサの純種と考えられるものが島嶼狀に残存してゐる。彼等はスーダンに侵入して以來其處でニグロを初めあらゆる民族と混交して極度の混血民族となつたものであらう。

ハウサ族は生れながらの商人であつて、ジブシーの如くに常に移動生活を營んでおり、資力のある時には商人として活躍し、金貸となり、賭博者の親元となり、都市建設者となり、資力のない場合は荷運び人として全スーダンにさまよい、戦時には忽ち掠奪者と化するものであつて、常に氣輕で、明るく、知的で、實際的であり、交通網を組織する名人であると云われてゐる。政治的にはむしろフルベ族が實力を持つてゐるが、經濟的にはハウサ族が勢力を持ちフルベ族の支配者や貴族はハウサ商人の財力に依存し

てゐるのである。兎に角、遙か南方のニジェリア一帯からカメルーン北部にかけての商用語としてのハウサ語の流通と、青色の衣服トベ (Tobe) の流行は彼等の活動を物語るものに他ならぬ。

さてマイヤーに依れば、コーラ・キャラヴァンは主としてカノ (Kano) — ゴンジャ (Gondja) 間を往復するものであつて、その接觸し通過する諸地域を豊かにし、刺戟し、住民に高い文化を興えていたのである。年々三月—五月の間にはカノだけからでも二十組餘りのキャラヴァンがゴンジャへ向けて出發し、その中最も早いものは九月半ばに歸着する。キャラヴァンは一千—二千人にも及ぶ大規模なものであるが、これは二—三百人の群が聯合して成立したものであつて、このことは森林地帯の好戰的な、掠奪を職とする部隊の攻撃を免れるために必要なものなのである。カノを出發するに當り彼等が籠の中に携えてゆくものは次の如くである。ゆつたりと仕立てた下衣、前掛、インデゴで染め刺繍で飾られた女の上衣、革製品、其他。さて、荷運び人、奴隸、驢馬、騾馬、牛、馬を引連れられた大商

西アフリカに於ける二つの交易形態 (岩田)

人、小商人が幾組か集つてキャラヴァンが成立すると、商人たちは仲間の間から經驗あり、勢力的で老練な男を指導者として、Madigu の稱號を呈する。此者は旅行中は絶對權力を持ち、宿所を指定し、争いを調停し、地方の有力者と交渉し、賦課税を各人に割當てる等のことを行う。キャラヴァンはゆつくり、然し秩序を保ちながら行進する。先頭には多くの駄獸、次に五、六十疋の重い荷を負うた女たちが更に手廻り品を下げ、子供の手をひき乍ら續き、その後を一行になつて荷運び人が進む、一人ひとり、或いは荷を負うた動物を追い乍ら。そしてこの兩側を荷主たちが武器を持ち馬に乗つて警戒する。Madigu は行軍の殿りを歩む。うるさく附きまとう乞食や、二、三の賤民に追われ乍ら。

これがハウサ族によるコーラ・キャラヴァンの體制である。また北方の工業製品と南方の農産物との間に組立てられた交易の體系である。しかも元來コーラの實と云うものは何等榮養上の必要物資ではなく、云わば社會的な意味を持つたものである。モンテーニ (Montell) によれば

ば、これは丁度ヨーロッパ人のコーヒー或いは老人の嚙み煙草に相當するものであり、ヒンズー人の蒟醬、シナ人の阿片の如き役割を果しているものであると云う。西スーダンに於ては之を嚙んでおれば如何に悪い水を飲んでも中ることがないと云う信仰があるために、猶一層愛用せられ、最も貧しい者と雖も日常之を嗜まないものはないのである。此の如くしてコーラは、契約、訪問、結婚などの際の贈り物となり、裁判、宣戦の布告、呪術などを行う時の媒介物となり、或ときは薬として、また媚薬として用いられるに至っている。つまり、住民のコーラに對する欲求は心理的—生理的なものであり、その底には云わば情緒的な魅力がひそんでいたのである。と云うことは今日、コーラはその様々な役割を通して社會的な價值にまで高められていると云うことであり、單なる効用を超えた一聯の社會的な動機を満足せしめることによつて、逆にその淀みない流通が確認せられていたのである。ハウサ・キャラヴァンはこうした mobile な社會的價值を中心として、道すがら局地的な小交易活動を営みながら南下し北上するのであつて、

繰返して云えばキャラヴァンはその接觸し、通過する諸地域を豊かにし、刺戟し、住民に高い文化を興えているのである。

會てトウルンヴァルト(R. Thurwald)は社會組織の根柢にひそんでゐる交互性(Reziprozität)の原則に注目し、更にその肉づけとして行動の均齊とそれに對應する社會組織の均齊とを指摘したことがある。また別の箇所において彼は、法の精神的根據をやはり人間相互の交互性の中に見出しているが、しかも彼によればこの交互性は單に力學的なものではなく、一定の文明化された制度と文化的態度とを共同に保持してゐるゲマインシャフトの裝備(Gefüge)として打たてられるものであると云う。云うまでもなくかゝる交互性、また行動と組織との均齊は、經濟的な領域に於ては一層明瞭に看取されることであり、コーラ・キャラヴァンと云う體制に於ては、更にそれが、固有の宿泊所、ハウサ道路、ソongo(Songo)と稱する宿泊地またはこれに依存している地方々々の市場、コーラ王と稱する首長の出現など幾多の現象を仲介として、やはり一つ

の地域的・文化的な裝備となつてゐることを思うのである。¹⁰⁾カノーゴンジャ間千五百料以上の距離と、春から秋への季節とを内に含んで、延數萬人に及ぶキャラヴァンの商人が年々一定の道筋をゆきまきするこの體制は、云わば西スーダンの骨組とも云うことが出來よう。

しかもここに注目されることは、今日かくも生々と營まれてゐるコーラ交易も、實は十九世紀になつて急速に廣まつたものであると云うこと。また、カノを中心とする北方の諸都市において繁榮し、重要な交易品目となつてゐる染色、木綿織物、衣服の調製などもその起源は古いものではないと云うこと。實際、レオ・アフリカヌス (Leo Africanus) の頃にはこの地方はたゞ絨物の賣りゆたかな未開の地であつたのであり、むしろ西方のゴゴヤティンブクツなどが黄金と鹽との交易市場として榮えていたのであつた。¹¹⁾即ち、西スーダンに於ては、古來幾度かその主要な交易品目に變化があつたのであり、或時は黄金であり、鹽であり、象牙であり、奴隸であり、コーラの實であつたので

西アフリカに於ける二つの交易形態 (岩田)

ある。然し何れにしろ其等の底にあつてそれ等を流通せしめてゐる交通網の組織は古來大なる變化をこうむることなく存在してゐたと云わなければならぬ。

古くヘロドトス以來、スーダンと地中海、或いは東海岸のソフアラ、更にはアラビアとの交渉については幾多の事實が數えられるが、しかもこう云つた事實は單に文化要素の交流を促しただけではなく、更に西スーダンをして一つの地域的な體制を整えしむるに至つたのである。イブン・バトゥータ (Ibn Battuta) によれば、サハラの或地點まで飛脚が來て居り、道案内者が居り、Zaghari と云う村には荷運び人の集團が居つたこと、また至るところの路上で自由に食物が調えられたことがわかる。また各都市にはキャラヴァンの宿主があり、旅行者に對する食物贈與の風があつたことなど、同じくバトゥータやバルトの記すところである。¹²⁾つまりこの地域は早くより交通運輸の組織において高度に發達したところなのであつた。そしてイスラムの侵入も實はこうした基盤の上に行われたことであつて云わば古き革袋に新しき酒を充したにすぎなかつたのである。¹³⁾

振返つて考えれば、われわれはかゝる地域的文化的な基礎に立脚したコーラ・キアラヴァンの體制と、イボ地方に見たごとき市場、午前には魚を捕えて夕方に之を賣ると云つた、或いは四日に一度賣りが廻つて来るような市場との間に、型としての大きな相違があると思うのである。然も以上の如く云わば發生的に考えてきた所以は、かゝる二つの型の相違が單に地域的な條件や、偶然の事情に由來するものではなく、深くそれぞれの社會自體の中にその根柢を持つてゐるものであるうと思ふからに他ならない。

四

一體、西スーダン、殊にハウサ族の故郷である北方のステップ地帯は、一つには實り豊かな穀物の地帯であると共に、一つには元來の遊牧地帯なのである。こゝでは農民と遊牧民とは互にその生産物を交換しながら、云わば食卓を共にすることによつて早くから移動生活への準備をととのえることが出來たのであつた。勿論、こうしたことの背後には乾季の比較的長く續くこの地帯の氣候條件や、土壤の

状態が特に穀物の生育に適してたと云うこと、またこゝが元來、有蹄類の跳梁する舞臺であつたと云うことなどが考えられ、人間生活は云わばこれを土臺として築かれたものなのかも知れない。しかしそれにしても季節の交代や、フォーナ、フローラの動きはそのまゝ人間生活のリズムをなすものではないであらう。自然は人間によつて擔われ、採用されなければならぬ。従つてわれわれはこの地方に於けるより具體的な生活を示すものとして、所謂眞晝の市場の商品を眺めてみよう。

バルトは、ソコトの市場において三十頭の馬、五十頭の牛、多數の革製品、奴隸、鹽、杏椰子と共に三百頭の屠畜をも見たのであり、マッセナの市場にては、黍、小麥、豆类、鹽、子安貝、飾り玉などと共に遊牧民の娘たちがバグヤミルクを運んでくるのに出逢つた。またブガリに於ては、二十頭の牛、六―八十頭の羊、十二頭の驢馬、衣服、黍、豆類、蜂蜜、バグなどが並べられていたと云う。

これらは彼の旅行記から全く任意に引用したものであつて云わば西スーダンに於ける極く一般的な商品と考えてもよ

いであろう。しかも更に興味深いことは彼によつて傳へられてゐる市場クカの模様であつて、そこでは訪問者は先ず最初に建築材料、支柱、壁の部分品、麻布などを商う店にゆき、次に戦闘用の牛、運搬用の牛、次に穀物を貯える大小の革袋、最後に衣服、裝飾品、穀物、干魚、バターなどを賣る店々を廻つて歩くことである。④そしてこれらバルトの云う眞晝の市場は東はチャド湖附近から西はニジェルの彎曲部に至るまでステップ地帯に廣く分布してゐるものであつて、われわれはこゝに移動生活への設備を確かめることが出来る。一方、イボ地方に於ては、ヤム薯やキヤサヅアの栽培をめぐつて家族全員の勞働が繰り返され、數ヶ月にわたる順次の收穫を頼りとして云わば土地に束縛され乍ら生活してゐるのであつた。彼等は市場への往復にも荷物を頭上に載いて、雨季には忽ち通過不能となるような細く溝のように凹んだ途を一行に並んで通うのであつて、車は云うまでもなく、牛や馬もまたツエツエ蠅の被害が甚しいために一般には利用せられてゐないのである。

フロベニウス (Leo Frobenius) は生活の軸と云うもの

西アフリカに於ける二つの交易形態 (岩田)

を考へる。北方のステップ地帯の住民においては、それは戰鬥的意慾、階級的矜持、牧畜者としての自負心と云つたものであり、一方サヴァンナ地帯の農民においては、播種—生長—收穫、誕生—成年—老年—死と云う自然運行のなだらかな秩序をそのままに受容する精神として、即ち苦しい農耕に従いながら老人に服従し、鍛冶屋や魔術師たちを尊敬する、敬虔にして陽氣な心にその軸を置いてゐるものと云うのである。⑤

しかし二つのパターンの相違は、所謂自然的基礎の相違や、單に並列的な二つの心の相違を以て了解されるものであらうか。

五

一九〇八年のニジェル川上流地方への旅行において、フロベニウスは次のような事實を観察した。即ち、西スーダンの人々はギネア海岸や中央アフリカの民族とは全く異つて、組織化されてゐると云うこと。⑥マンディンゴ族の村において織工が朝から晝まで午後から夕方まで絶間なく織機

を動かしていること、騒々しいキャラヴァンの到着や出發のときさえも彼等はその手を止めようとしなない。此處では織工ばかりでなく、革細工師も、鍛冶屋も農夫も全く勤勉であつた。例えば家を建てるにも、午前には藁を編んで屋根をつくり午後三時間で莖架をつくり、更に二時間かゝつて壁を塗ると云う具合に十四人の男が僅か二日で建て了せてしまつたのである。しかもスーダンの若者たちは働くことを當然のことと思つてゐる。フロベニウスは初めその理由を日頃彼等が行つてゐるハック耕の中に求めようとした。けれどもハック耕による労働の結果と云うことであるならば、森林住民の女たちが行つた茶園農業の方が遙かに緊張を要するのであるから、只これのみを以て組織的労働の理由とすることは出来ない。そこで彼は次の如く考へた。この地方は沙漠からの相次ぐ遊牧民の侵入によつて幾度か踏み荒され、その度毎に男は捕えられて苛酷な農耕に追いやられ、女も亦手工業等の労働を強いられ、その間には多數の混血民族が出來てゐた。民族的集團としての結合は侵入者によつて縦横に解體せしめられ乍ら、云わば無力な個々人とな

つて支配者の強制に服しつゞけたのである。彼等は奴隷と云う苦しい管の下で教育されたものなのである。そして今日にはもはや何等の束縛も不要なほどに日々の労働は彼等の組織に浸みこんでいるのである、と。かくして先ずスーダンは個人として組織せられたひとびとが居る。

次に、若しも人が森林の中の空地に踏み入り、其處に繰りひろげられてゐる生活の繪、手入の屈いた耕地、清潔な秩序立つた村、またその家の中へ入つて多數の家具や身の廻り品がよく整えられ、彫刻で飾られてゐるのを知り、住民の派手な衣服、落着いた態度、總じてその場所における豊かな草藥的な文化を眺め、一方ステップ地帯を尋ねて、遊牧民のあてどない天幕生活を思い、損じた衣服、家畜と僅かの裝身具以外には一見何等の文化財をも持たない貧しさとを比較するとき、往々にして遊牧民は農耕民に比して低い文化しか持つてゐないものと考へ易い。然しフロベニウスによればこうした判断は決定的に誤りであつて、遊牧生活と云うものは實は文化の野性化した状態（Verwildungsform der Kultur）なのである。實際、森の中の住民は

個性的な優れた藝術品をつくり出すが、彼等はその森その村落から一步外へ連れ出されると直ちにその能力を失つて了う。然し遊牧民の文化は個人の意識にまで深い襲を刻んでいる。それは知識となつて定着している。それ故沙漠やステップの住民の中には文明人の如くに個人的な關心の範圍を持つてゐる幾種類かの人間が居る。或者は部族や家族や個人の歴史を語り、或者は甲虫や蝶や木の葉の凡ての種類を知り、或者はたえず藥草を探し求め、物知りたちは互に知り合つて次第にその領域における専門家が出來てゆく。また或者は法の本質について思いに耽り、他の人々は家畜を見張ることを學び、星の運行に注目する。彼等は他民族によつて追いつてられることもある。すべての財産を奪われることもある。けれども彼等はやはりその身についた文化を失うことがない。フロベニウスによれば彼等は深い文化 (tiefe Kultur) を持つてゐるのである。^⑤

ステップ地帯は、一つにはこうした深い文化の持主である遊牧民と、一つには彼等との長い間の接觸によつて訓練せられた農民、手工業者、奴隸など、要するに文化的な篩

いによつて選擇され淘汰せられた人びとの住地であつたのである。われわれは此處にさきのハウサ族の性格を想起してみた。

一方、南方の森林或いはサヴァンナ地帯の住民は如何であらうか。その生得的な性能においては、彼等もまた北方の住民と甚しい差違を持たなかつたものであらうが、數百年にわたる孤立的、封鎖的な生活は彼等に特殊な性格を與えることになつたのである。或る森の住民は一軒の杙上家屋を建てるのに十四人の男が着手して十六日間を要したのであつて、極めて遅々たる仕事ぶりであつた。即ち一般に森の住民は怠惰なものとせられている。また實際これは多くの場合に疑いない事實であるが、しかし彼等とても常に怠惰なのではなく、或期間は熱心に働くのだが、それに續いて所謂のらくらな時期があると云うのである。けれどもより正確に云えば、このことは彼等には彼等のカレンダーにあると云うことに他ならない。此處では他部族との間に競争がないから、たゞ自らの關心、自らの興味に移るまゝに

激しい勞働の後にはやはり心身を陶醉せしめる歌と踊りと森に木魂する太鼓のひびきとが續くのである。キートソン(Kitson)によればイボ族は非常に歌がうまう、ハーブやヴァイオリンやフルートのような樂器を操つて巧に歌う。彼等はまた家のまわりの土壁に浮彫を施し、木製の扉や柱を飾りつけ、社や祈禱所に人形を並べ、彫刻や繪を好む。のみならず彼等自身の身體にも部族のマークを刻み込んでおり、入念な入墨を行い、また赤や黄の顔料を塗りつけ、眼の縁を白く染めていと云う。^④

一體、こう云つた豊富な粉飾は、何れもイボ族における社會的凝集力の極めて大なること、むしろ過剰なまでに集團の情緒が強調せられていることを示すものに他ならない。耕作―狩獵―交易―手工―鍛冶―假面舞踏―唱歌―呪術―彫刻―等々と云つた雑多な事項の間に織りなされている一連の行動は、こゝでは飽くまでも生々とした集團の情緒につままれて、動かすことの出来ない一つの型にまで造形されていたのであつた。勿論人によつて多少のニュアンスの相違はあるが、何れの場合にも個人の行動は一から

一へと隙間なく結びつけられている。だから若しも彼等を森から連れ出したり、行動の一環、例えば呪術をぬき去つたりすると、彼等はその行動の均齊を失つて途方に暮れなければならぬ。

しかもわれわれは、こうした行動様式もまた、實は文化的な飾りの相違、或いは社會的な教育の如何に起因するものと思う。以下その一例としてイボ族の社會に於て果してゐる『死』の機能について考えて見たい。と云うのは、ブーグレ(C. Bouglé)が云うように社會に於てはひとが死ぬ度毎に集合的持續の條件である傳統の糸がいわば切斷され、ひとが生れる度毎にその糸を再び結ばなければならぬからである。^⑤

イボ族においては、死は強度の拘束力として社會と云う目的の體系の中に組入れられている。一體イボ族の世界は、ヌーン(J.A. Noon)によれば、深く超自然の力によつて統制されており、この世(anu nmo)と、靈たちの住む彼の世とは種類にして三種類、しかもそれぞれ極めて多數の超自然力によつて結びつけられているのである。^⑥

ーンは十二の例（所謂 case study につ）を擧げて説明しているが、結局、死は此處では一つには制裁として、一つにはこの世からの分離を社會的に理由づける證據としての機能を果していると云うことが出来る。他のところでは社會を維持するために教育が果す役割を、此處では死がその怖れを通じて常に同じように果して來たのである。

1. 少年Bの母は熱心なクリスチャンとなり、Bに部族のタブーとして禁ぜられてゐる犬を愛玩用として與えた。

然しやがてBの入社式の時になるとそのクランの術師（okpalia）は、Bが既に穢れつゝゐるからとの理由で式を拒絶して了つた。ところがそうしてゐるうちにBは咳を（これこそは犬の吠聲にちがいないが）するようになつた。母は驚いて別の術師にたのみ、入社式をすませたが時すでに遅く、Bは死んだ。

これは或る超自然力の怒りに基くものと認められた。母が部族のタブーを犯した事に對する當然の制裁であつて、母は子供の死によつて強い反省を迫られることになつた。

2. Eは目立つて美しい少女であつた。彼女は私（報告者）

西アフリカに於ける二つの交易形態（岩田）

の兄Vと親しくしており、或時Vに結婚してくれように話したことがある。Vが拒絶したのでEは或る金持の老人と結婚した。老人は若い妻によつて子供を得、兼ねて以前の妻によつてばらまかれたスキャンダルを拂拭したいと思つていた。妻はすぐにみごもつた。Eの母は子供の生れることを思つて犠牲をそなへ、Eに或種の軟膏の塗布をすゝめた。が彼女はそれをしなかつた。子供の生れる二週間ばかり前に私は途上でEと會つた。彼女は私に兄のことを尋ね非常に逢いたがつてゐる様子を示した。私はVが近頃仕事を探しに村から出てゐることを告げたが、彼女はなおもしきりに何かと機會をつくつてくれるように私に頼むのであつた。まわりに自分の家族が居るのに何故Vのことを考えるのか、と私は云つた。私はそのときEが靈たちの呪詛（*iyi uwa*）にとりつかれてゐるのだと云う噂のあることを思い出した。二週間ばかり町へ出てゐてから家へかえつて來たところ、兄がとんできて次のように云つた「Eはお産のときに死んでしまつた。きつと *iyi uwa* のためだと思ふ。と云うのは

Eはいつぞや、自分が騙そうとしなかつたものは只、私Vだけであると云つたことがあるから」と。

iyi uwa は、彼の世にあつて再び受肉の機會を待つてゐる靈のグループに由來する呪詛である。彼等は再び生れ出ようとする世界を嫌い、それに對して呪いをかけたのである。この iyi uwa はその人を騙すために、最も親しい最も身近なものに接近し、例えばEの如く老人の妻となりその信賴をうけ乍ら、正に子を生むと云う瀬戸際に、突如として世の中を欺いて死ぬのである。その死を一層悲劇的なものたらしめ、世界に對する呪いを一層効果的にするために。ところで若しVがEの願いをきいて結婚したならばEは術師のところへゆき呪詛を告白して之を取除いて貰うことも出来た。が、拒絶せられたのでEはその iyi uwa の故に老人を騙したのである。こうした行爲に對する社會の憤りは烈しく、親族の女たちは死者を罵つてこう云うのである、『私たちはおまへがこんな馬鹿だとは知らなかつた。おまへなどは埋葬される資格がない』と。Eのこうした背信行爲は老人の家族にとつては新しく打建てられた

家族結合の破壊であり、生れる子供によつて受け繼がれる筈であつた家名と、祖先への祭儀の斷絶であるばかりでなく、經濟的には既に支拂つた花嫁料の損失を來したのであつた。かくして之をめぐつて兩家族は争いを起しかねまじき形勢に至つたのである。こうした場合社會はEの行爲を決定的に反社會的なものと看做し、その死因を呪詛であると斷ずることによつて烈しくEを責めたのである。勿論Eは既に死んでゐるから、責めることによつて老人家族は満足し、社會は成員の行爲を規正しえて更に未來に自己を維持してゆくのである。一旦、新しい家族の秩序に入つたならば、Eの如くに昔の夢を追つてはいけないのだ、と云う風に。つまり、イボ族においては死を通して強く社會の拘束力が働き、成員の行爲が永く一定の型、一定の範圍の中に保たれることを得てゐるのである。

以上、僅かに二つの例であつたが、イボ族においては社會のソリダリティが成員のすべてを隈なく包み込んでいたことがわかる。此處にはステップ住民の如く特殊化された個人はいない。従つて彼等には自己の住居、自己の故郷か

ら只一人遠く離れて交易活動を営むなど、と云うことは考
えることも出来ないことであろう。

今日、イボ族は他の支配部族によつて統治されているの
ではなく、呪術的—宗教的な首長 Eze-Nhi を中心として
結合している。個人と個人、社會と個人とを結ぶものは血
縁的なものであり、呪術的—宗教的な細かな網目である。
そして個人の行爲は傳統的な規範と輿論とによつて強く制
約せられている。ところがこのことは丁度隣のベニン、そ
の隣のヨルバ族において起つたことであるが、部族の中
心、例えば Eze-Nhi の代りに北方出身の有能な一個人が
入り込み、こゝに所謂指導者の交代と云う現象が起るので
ある。結果のみを云えば、そのとき前者の支配網はそのま
ゝ後者の支配網として利用され、呪術的—宗教的な結び目
はやがて政治的—商業的なそれとなる。

此處に於てイボ族の小市場網は云わば原初的な自然發生
的なものであり、ハウサ族による大きな交易體系はそれを
兼ね連ねたものであると云えよう。

西アフリカに於ける二つの交易形態(岩田)

六

フアース(R.Firth)が云うように、經濟的活動は食物
や住居のごとき基本的生理的欲求に對する人間の應答であ
るが、然しそれらの欲求はたゞ社會的環境の中に於てのみ
表現され得るものであり、更に文化的欲求にまで形を變え
てゆくことによつて初めて行動への刺戟となることが出來
る。故に人間の行動は、理性的な努力によつて自然環境の
季節的變化や、フオーナ、フローラの動きに適應しつゝ、
しかも社會的な一群の價値を認めることによつて、云わば
傳統的な鑄型の中で行われている。また、その型、その行
動には決して隙間のあるものではない。未開社會において
はそれは例えば魔術によつて架橋されている。文明社會に
おいては、互に眼を交し合つたり、粧い飾つたりすること
によつて埋められている。そして此處に行動の連続が成立
しかねて行動の様式が成立しているのであると思う。従つ
て云うまでもなく、パターンの相違は單に經濟的なもの、
或いは自然的基礎に由來するものではないであろう。自然

について云えば、自然もまた間に對して應答するものであるが、問の方の相違は實は人間の習得的な社會的行動の相違にもとづく。

西アフリカに於て、二つの交易を中心として眺めたパターンの相異は更に多くの錯綜した事情をその背景に持つものであるが、こゝでは主として一聯の人間行動の相違、更には社會的な訓練或いは教育の相違にもとづくものと考へておきたい。勿論、これでは又一つの新たな出發點に戻つたわけであるが、交易範圍の相違と云うごとき地理的な問題にも、やはりその底にはさまざまな變異を含んだ人間の未知の姿がひそんでいた。その姿は撓め易い(Flexible)しかしもとの型に戻り易い(elastic)ものである。われわれは此處から出發することによつて、地球は人類の學校(Erziehungshaus)と云つたカール・リッター(C. Ritter)の古典的な考方をも蘇らせ、更には個々のパターンや形態の相違を打破る常に新たな動きをも把えることが出来るのではないかと思ふ。

註

① H.Barth: Reisen und Entdeckungen in Nord-und Central Afrika, 1857 年の中、例えば Bd. II, s. 138. 貨物の市々々カ、カノ、ソコトから西はティンブクツまでメテップ地帯にひろく分布している。

② P.C. Meyer: Erforschungsgeschichte und Staatenbildung des Westsudan, Peterm. Mitt. Erg.-Heft 121, 1897

③ P.Dittel: Die Besiedlung Sudnigeriens, 1936. s.92 然つて L. Pietsch によれば東インド起源と云う。柔は北西イボ地方のみ。

④ これが Thurnwald によれば農民と遊牧民との接觸の結果、後者の優位をその家畜の上に認めて前者がこれを尊重しているのであると云われる。

⑤ このことは例えばニュージラントの北東海岸の農耕部族においても然りであつて、彼等は一年を十二ヶ月に區分するがその十ヶ月にしか名前はなく、労働のない残り二ヶ月は輕視されてゐる。

⑥ A.Goldenweiser: Anthropology, 1937. p. 479. には次のこと云つてゐる。

特に未開社會においては、その生活を可能にし合理的に維持し

てゆぐためには物理的な環境の中の利用しうる資源との生きたバランスを維持しなければならぬ。地方文化はその物理的な環境に技術的、経済的な縮りを下し、それを中心として文化を形成してゆかなければならぬ」と。

⑥ P. Dittel 前掲書。

⑦ イボ過問の起源については P. Dittel 前掲書 p. 104—5 の註。又 村、Leo Frobenius: *Erlebte Erdteile*, VII Band, s. 379. VI Band, s. 131.

⑧ G. T. Bastien: *Notes on the Ibo Country*, Geogr. Journ. al, 1925.

⑨ コーラの實は南方の森林地帯にある産地から直接にスーダンの商人によつて買取られるのではなく、先ず一種の秘密結社をつくつてゐるロ族 (Lo) が果實を秘密の場所からはこび出し、第一のコーラ市場 Odienne, Tute, Kani, Siana, Sakhala 等にはこぶ。次に此等の場所から今度は大つて女たちによつて、本来のコーラ市場 Tangrela, Manimim, Sambaligira 等へはこばれ、ここで始めてキヤラヴマンの商人に買取られる。一方その北の限界は、大凡、子安貝の流通範囲と同じく、沙漠の内部にまで運ばれることがなく。

西アフリカに於ける二つの交易形態 (岩田)

⑩ F. Ratzel: *Völkerkunde I*, s. 648. III, s. 192.

⑪ P. C. Meyer, s. 23.

⑫ Barth, Bd II. 150, Bd V. 27-30, BdV. 292, P. C. Meyer, s. 85.

⑬ R. Thurnwald: *Ethnologische Rechtsforschung* (Lehrbuch der Völkerkunde 1939 所収) s. 233.

⑭ キヤラヴマンが比較的長く留つてゐるような大きな村には特別の宿所があり、サヴマンナ地帯では一年中水の絶えない川のほとり、大きな樹の蔭に宿る。そこには多数の小舎或いは風除けの設備がある。所謂ノンゴである。ノンゴはその川或いは高い木、等によつてそれぞれに命名をされている。

⑮ Barth, Bd II. s. 147. 例えばカニにおける染色は十七世紀以來のことである。

⑯ Ibn Barutia, by H. A. R. Gibb, 1923. p. 319.

⑰ *Kulturgeographische Betrachtung Nordwest-Afrikas*, Zeitschrift für Erdkunde zu Berlin, 1909. 2444 von K. P. von L. Pletter: *Verbreitungsgebiete wichtiger Nutzpflanzen der Kolonien* の意見。

⑱ L. Pletter: *Verbreitungsgebiete wichtiger Nutzpflanzen der Eingeborenen in tropischen Afrika*, Peterm. Mitt. 1927

s. 143

- ② Barth, Bd. VI. s. 181. Bd. III s. 338. s. 296. Bd. II. s. 391.
- ③ L. Frobenius, Kulturgeschichte Afrikas, 1933. s. 248
- ④ L. Frobenius, Erlebte Erdteile, Bd. III. s. 269.
- ⑤ L. Frobenius, Erlebte Erdteile, Bd. III. s. 274.
- ⑥ L. Frobenius, Kulturgeographische Betrachtung Nordwest-Afrikas. 1909.
- ⑦ A. E. Kitson, Southern Nigeria: Some Considerations of its Structure, People, and Natural History. Geogr. Journal, 1913.
- ⑧ 平山高次郎 價値の進化
- ⑨ J. A. Neom, A preliminary Examination of the Death Concepts of the Ibo, Ann. Anthropologist, vol. 44. No. 4
- ⑩ R. Firth, Primitive Economics of the New Zealand Maori, 1929, p. 26.
- ⑪ M. Mead, From the South Seas, 1939, P. xlii.

人面蛇身虺龍文盃 現高一八・一窟

過般の大戦中に中國から海外殊に米國に流出した古美術品の數は夥しいものであるが、中でも古銅器の類に於いて著しいものがあるように見受けられる。こゝに圖示したのはその古銅器の中で形態が極めて特殊であり、而も河南省彰德府外の殷墓から出土したとの傳へを伴ふ點で研究上注意を惹くものなのである。いま夫はれてあるがもと提梁があつた點で、「見直の如くとも思はれるが、而も器の本躰は酒に水を和する盃の一種と見るべきであつてその蓋に表はされた双角の人面をした怪物の躰軀が蛇身であつてそれが器體を繞つて主要な裝飾をなし、右の間に虺龍、形形雷文の古銅器に通有な圖形を配するところ、器形と裝飾との間に不離な關係を示してよくこの器の特色をなすことが認められる。そして見る人をして自からどうしてか様な器が作り出されたかと云ふ當代の文化背景に思ひ及ばしめるものがあらう。この器は黄濬氏の『鄴中片羽』に既に收録されてゐるが、一九四二年に華府のフリーア美術館の有に歸したというので、戦後館長のウエンレー氏から特に寫眞を贈られた。そこで本誌に掲げて廣く我が學界に紹介して、研究者の參考に供へる次第である(梅原未治)